

〔箋注倭名類聚抄四〕原書蝨部作蠶又載蜜字云蠶或从宀原書甘飴上有蠶字此恐誤脫按今俗

煎沙糖取汁呼爲沙糖蜜煎石蜜取汁呼爲氷蜜謂蜂蟲釀成者爲蜂蜜爲白蜜略○中 所引文今本玉篇不載按證類本草引陶弘景云凡蜂作蜜皆須入小便以釀諸花乃得和熟與此所引合

〔下學集下〕蜜衆造之也

〔東雅十二〕飴アメ略○中 又○倭說文を引て蜜は蜂甘飴也俗にミチといふと注せりミチとは其字の音をもて呼びし也古の時に甘味にはむねと蜜を用ひひこれに次ぐには飴また甘葛煎の如らぬものとはなりたりた

〔空穂物語藏開上〕春宮にさぶらひ給中納言のいもうとのもとよりも一斗ばかりのかねのかめふたつにひとつにはみちひとつにはあまづらいてきばみたるしきしおほひて○下

〔和漢三才圖會五十二〕蜜蜂糖蜜字略知

按蜂蜜出於紀州熊野者最佳藝州之產次之今多用沙糖蜜偽之沙糖與膠飴相和作之眞蜜黃白偽蜜色黑易乾

〔日本山海名產圖會三〕蜂蜜 一名百花精 百花蕊

凡蜜を釀する所諸國皆有中にも紀州熊野を第一とす藝州是に亞ぐ其外勢州尾州土州石州筑前伊豫丹波丹後出雲などに昔より出せり又舶來の蜜あり下品なり是は砂糖又白砂糖にて製す是を試るに和產の物は煎すれば蜂おのづから聚り舶來の物は聚ることなく此をもつて知る蜜は夏月蜂脾の中に貯へて己が冬籠りの食物とせんがためなり一種人家に自然ニ脾を結び其中に貯はふ物を山蜜といふ又大樹の洞中に脾を結び貯はふを木蜜といふ以上熊野にては山蜜といひて上品とす又巖石間中に貯はふ物を石蜜と云又家に養て採る蜜は毎年脾を采り去る故に氣味薄く是を家蜜といふ脾を炎天に乾かし下に器を承けて解け流る物をた